泉穂のいまどき恋愛講座……

女のコの方から積極的に恋をしかけるってこと、とても素敵なことだと思います。最近の男のコたちって、どうも弱気だし、きちんとアプローチできない人が多いし、そうなると、女のコの方から上手に誘うってこと、絶対に必要だもの。

実際、積極的な女のコって、すごく増えてきているみたい。

だけど、『上手に』恋をしかけているかというと、とっても疑わしい！これは、別に女のコだけに限らないんだけど、誘う時には誘う側のマナーというか、こまやかな気遣いが必要だと思う。

私のボーイフレンド（文字通り、ただの男友達）が、嘆いていた。いきなり、会社で、ある女のコ（一度もデートしたことのない）から「12月24日の晩、あいてる？」と聞かれたらしい。彼はとっても困ったそうよ。

そりゃそうだ。いきなり「あいてる？」と聞かれたってねぇ。実際は、予定は入ってなかったけど、一体、何の誘いだか、解らないじゃない。

同僚同士で馬鹿騒ぎをするパーティーなのか、それとも、その女のコからの個人的な誘いなのか、あるいはその女のコの友達からのデートの誘いなのか、「12月24日、あいてる？」と聞かれただけでは、まったく解らない。内容によっては、行っても良かったし、内容によっては、行きたくない。ましてや12月24日の晩なら、なおさらではないでしょうか。

結局彼は「あいてるよ」と答えてしまったそうだ。そして、彼女はニンマリと笑い、「私とキャッツを観に行こうよ！」と言ったわけだ。

やられた、と思ったね。

これはワナとも言えますね。

もうここまできたら、彼だって断わりようがないじゃないねぇ。

彼女はこう言うべきだったのよ。

「12月24日の晩のキャッツのチケットが手に入ったんだけど、良かったらご一緒しませんか？いろいろと予定もあるだろうし、返事はゆっくりでいいわ」と

誰と、何をする誘いなのか、内容を伝えてから、相手の予定を聞く。それは相手が、もし内容を気に入らなかった時に、断らせてあげる余地を残しておく、ということです。

相手が誘う側に気を使うことなく断るムードを作ってあげることができる人なら、きっと一緒にいても楽しいだろうし、会話も盛り上がるだろうと思う。

いきなり「12月24日、あいてる？」なんて無神経な尋ね方をする人は、デートをしても、自分のことばっかり一方的に喋りそうだわ。

実際、彼は彼女とのクリスマス・イブを史上最低の12月24日、と名付けていた。まさに一方的に自分自身のことを喋ったあげく、「私って、どう思う？」と単刀直入に聞いたそうだ。

どう？も何も！てめーみたいな奴に、興味持てるかよ！というのが、彼の正直な気持ちだったことでありましょう。

私は同情します。

女のコから積極的に恋を誘うのは大賛成だし、私だってそうしてきたけれど、積極的というのを勘違いしてはいけないわ。それは決して、『押して押して押しまくる』ことではないのよ。

相手のことが本当に好きなら、彼に余計な気遣いをさせないために、つまり断わりづらくて心を痛めさせるなんてことのないよう、こちらが万全を尽くすべきです、絶対に。

でもね、そもそも私だったら、一度もデートしたことのない男のコを、いきなり12月24日に誘うなんて馬鹿な真似はしないわね。

まずその前に最低一度は二人でアルコールを飲むくらいのことはしておきます。

こっちにしたって貴重なクリスマス・イブなんだから、一度もまともに会話したことのない相手と過ごすなんて、賭けみたいなモンじゃない？

で、前もって一度ゆっくりお話でもして、お互いいい雰囲気になって、初めてクリスマス・イブを誘うってのが、正式なルールよ。

それだったら、彼にだって心の準備もできていたと思うしね。

恋に積極的になるってことは、そのぶん、小さな気遣いや心配りをいっぱいしなきゃいけないってこと。それなしで、積極的にぶつかっていっても、相手は腰を引くだけよ、間違いありません。

MARUOKA IZUHO

【プロフィール】1965年生まれ。同志社女子大学卒、株電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に『あふれた無邪気が罪になる』（PHP研究所）、『キスまで、待てない』（大和書房）など。

マンボカーパラダイス

タクシーに乗ろう

もしかしてタクシーの料金が下がったんでしょうか？京都へ出かけたら、必ずMKタクシーに乗りなさいと、ある人から教えられてから私は一度も浮気をせずにMKタクシーばかりに乗っています。なんでも他の会社のタクシーに乗るよりも、ごっつぇサービスが受けられるとかいうのを信じてのことなんですが、今までこれといったサービスを受けたことは残念ながらありません。そういえば一度だけ、京都駅の前でMKタクシーに乗るときわざわざ運転手さんが降りてきてドアを開けてくれたことがありました。でもそんなことくらいです。いつか受けられるかもしれない、秘密の過激サービスがあると信じてこれからもMKタクシーに乗り続けてみます。でも遠くから走ってくるタクシーを見分けるのって、結構大変なんですよね。屋根の上の行灯だけがたよりでしょう。その行灯なんですがこの前博多に行ってタクシーボディーにふつりあいなくらい大きい桃がついているタクシーがあって、大変感動してしまいました。私が生まれた札幌では、京都同様観光地でもあることから、時計台やスズランそれに最近では雪ダルマの行灯なんかがあって、一緒に行った道外の友達につい自慢したりしています。ふつう鳥鹿にされますが。

京都も、五重之塔だとか、観音像をモチ

HAP HAZARD REMARKS

着だおれ京都人に送る。

『ササイな情報』2

シビラ・ソロンドという名刺が我々の耳に入ってきたのは88年のことだった。88／89年秋冬ミラノコレクションでデビューしたスペイン・マドリッドのデザイナーは、それまでのパリやミラノ、ロンドンなどのデザイナーと違って、本当に気どりのない可愛い女性を見せてくれた。

コレクションだけじゃなくって、本人も実にシャイ。3年ほど前に神戸にコレクションのために来たときも、主催者側の用意した記者会見を、自分の挨拶だけで、質問は受けずに席を立つという小悪魔ぶり。その時のはにかんだ態度と、けだるさはデザイナーという以上に、次の時代の可愛くて気まぐれな女性像を演じきっていた。

まだ、エコロジーなどという表現が、あまり宣伝されていない頃ではあったが、シビラの服は確実に次の時代の服を暗示していた。今振り返ると、その後のスペインブーム、ナチュラル指向といったファッションの流れは、彼女がミラノコレに登場したことが、導火線になったように思う。

何より、妙な符号に思うのは、彼女が登場した以降のラテンブームで、ヴェネズエラ盤やスペイン盤でリイシューされたブーガルーのレコードが日本のレコード店にコーナーを構えて並び始めたのもこの頃だった。余談だが、88年はサルサのウィリー・コローンが11年ぶりに、ティト・プエンテ、セリア・クルースも来日した。しかし、最終的にラテン＝スペインという構図に至ったのはジプシーキングスの「ジョビジョバ」の大ヒットの影響だろう。

しかしながらスペインからのデザイナーは、結局シビラ以外成功しなかった。アドルフォ・ドミンゲス、ロゼ・マルセなど一時期日本でも、バルセロナオリンピック前にスペインファッションが持てはやされかけたがこれは無理。同じヨーロッパとは言うものの、フランスやイタリアほど、あの国はお洒落に対して貪欲じゃないし、スペインがモダンデザインにマーケットを解放したのは、75年のフランコ政権が終ってからのころで、本当に活気を持ち始めたのはECに加盟した86年以降。シビラはそんな時代の中で現れるべくして出たデザイナーで、イタリアのジポー社というメーカーがバックに付いていたことも、大きかった。

現在、シビラはジポー社から、日本のイトキンにメーカーが変わっているのだが、今年の秋冬物から、シビラがプロデュースするハイティーン向けのブランドがデビューする。当面は日本だけで販売されるのだがこれが面白い。

「ホコモモラ」というブランドのネーミングからして変だが、シビラの考える実用性が幅広いアイテムで展開される。商品はとりあえず安くて、サイズも豊富。カットソーで5,000円程度。何より面白いのはショップの什器で、観覧車のようなハンガーラックやオモチャのようなフィッティングルームなど、シビラのキッチュな趣味が楽しい。遊園地をイメージしたものらしいが、これを見て思い出したのは、バルセロナのプロバンサ通りの辺にあった「ラ・フィラ」というバー。サーカスを思わせるその店は、50～70年代の遊園地の乗り物やゲームが店内の派手なペイントとともに置かれていて、ブランコに乗りながらビールを飲んで、女の子を口説くという異空間。ペドロ・アルモドバルの映画にうなされる方は、ぜひ遊びに行って欲しい。

そのアルモドバルの最新作「ハイヒール」デモシビラの洋服は登場するのだが、シビラを理解する入り口としての「ホコモモラ」に、とりあえずは注目。

NODA TATSUYA

【プロフィール】1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで、関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

ーフにした行灯のタクシーが登場すると街の雰囲気が変わるのになあ。運賃値下げもイイけど、こういうことのも気ィー使ってみてはくれませんか、MKの社長さん。費用対効果ははとんど無いと思いますが。

そういえば、この前東京の個人タクシーでカラオケタクシーに乗ってしまいました。これは凄いよ。行き先を聴いたあとスグに手渡される曲目リスト。小林幸子、都はるみ、坂本冬美が多いのがちょっと気にかかる。さあ、なんでもどうぞ！というものの、いや遠慮しておきます、というのが普通だろう。なんでタクシーに乗ってまで、見ず知らずのオヤジと一緒に唄わなければならないの、なんて思っていたら運転手が、私一曲唄わせていただいてもよろしいですか、ときた。どうぞどうぞなんて言ってしまったから、いきなりヘアンコ椿は～とやりだしたのには呆れた。ドリカムの人みたいにインカムをつけているのだが、さきっちょのマイクは音質のいいものに取り替えられていた。あの一次の角を右へ行ってください、とか言っても、うなづいて反応するものの唄はやめない、さすがプロ。どっちのプロだかわからないけど、とにかく唄はうまいと思った。降りたあとで、トランクのところに第○回カラオケグランドチャンピオンというシールが何枚も貼られていたのには笑った。たまたま千円位の距離だったから良かったけど、オヤジにレパートリー全曲唄われるような距離乗ることになっていたらと思うと、それはそれで楽しいのかなーなんて考えてしまう私でした。ウッ！

PARADISE YAMAMOTO

【プロフィール】元東京パノラママンボボーイズのコンガ奏者。富士重工業デザインセンターでデザイナーとして活躍。趣味で始めた盆栽も、マン盆栽という新しいグリーンアートとして、7月29日から8月2日まで東京渋谷パルコパート3で2度目の個展を開催。